フィンランドの第二次世界大戦

笹岡　臣

序文
1.　フィンランド国家概要と二次大戦中の動向
2.　冬戦争
 2.1　開戦当時の両国比較
 2.2　開戦までの経緯
 2.3　開戦と戦況の変遷
 2.4　両軍の損害
 2.5　講和とその後
 2.6　ソ連の苦戦とフィンランドの善戦の要因
3.　継続戦争
 3.1　開戦の原因
 3.2　開戦直後の快進撃からドイツ軍によるモスクワ攻略の失敗
 3.3　単独講和への道
4.　戦後
5.　総括
参考文献

序文

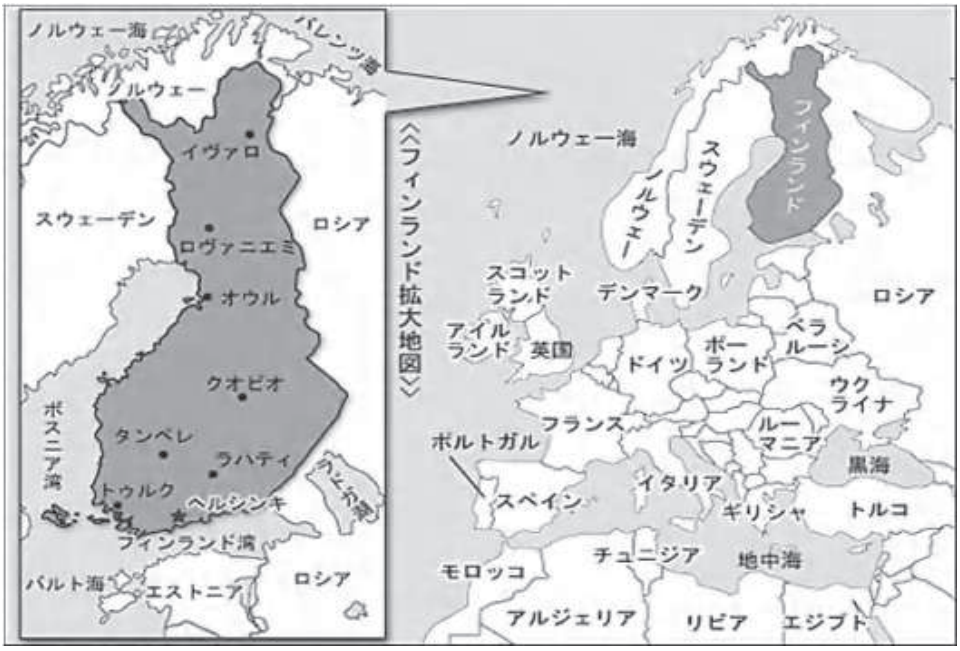
フィンランド。この国名はそれなりに聞いたことのある人も多いことだろう。昨今のヨーロッパでは、中東から流れている難民の扱いが政治課題となっており、国内のニュース番組や新聞でも、フィンランドの政府による難民受け入れ宣言を発表したことなど話題になっている。

しかしながら、かの国が第二次世界大戦中、また、その後の冷

戦下の国際社会において極めて奇妙な存在であったことについてはご存知だろうか。二次大戦序盤では連合国寄り、中盤から後半では枢軸国寄りであった。さらに特筆すべきなのは、大戦終結後には共産陣営に属していたにも関わらず、政治では議会民主制、経済では資本主義体制を維持し続けたことである。冷戦下の東側陣営[1]はおよそ 60 ヵ国ほどであるが、このような例は他には存在せず、また、有史以来という長い期間であっても存在しない(筆者の知る限りでは)。これは奇妙と呼ぶほかないだろう。

本稿は、その「奇妙な国」であるフィンランドが、いかにして第二次世界大戦を戦い抜いたのかを軍事の面から、また、いかにしてそのような体制になったのかについて解説するものである。

1. フィンランド国家概要と二次大戦中の動向



フィンランドとは北ヨーロッパに存在し、西側をスウェーデン、北側をノルウェー、そして東側をソビエト連邦（現在のロシア）に囲まれている国家である。首都はヘルシンキ、人口は約 530 万

[1] ここでは冷戦中にソ連の軍事勢力圏にあった国を指す。

人である。そして、建国以前はロシア帝国領だった。

文化の面ではムーミンの舞台であり、また、経済面では通信機器メーカーのノキアや、コンピュータＯＳであるLinuxが有名である。

また第二次大戦中には、1939年11月30日から1940年3月13日にかけて行われたフィンランドとソ連の戦争であり、冬戦争(正式には第一次ソ芬戦争）と呼ばれる。

そして、1941年6月26日から1944年9月19日にかけて再びソ芬両国間で行われた戦争が、継続戦争（第二次ソ芬戦争）である。

この二つの戦争で、フィンランドは大きな犠牲を払いながらもソ連の侵略を防ぎ、独立を維持した。

2.　冬戦争

2.1 開戦当時の両国比較

	フィンランド	ソ連
人口	約370万人	約1億7000万人
兵員	約19万人	約45万人
戦車	30輌	約2385輌
大砲	123門	約1880門
航空機	130機	約670機

2.2 開戦までの経緯

1939年8月23日にナチスドイツとソ連との間で独ソ不可侵条約が結ばれた。この条約には秘密議定書が含まれており、その中には独ソ両国間に存在する国家の領土的及び政治的な再編が約束されていた。

この条約を背景として、ソ連はドイツと同じように自らの勢力圏を広げようとバルト三国やフィンランドに対し軍事的圧力をか

けつつ政治的な最後通牒を突きつけていった。

フィンランドには、バルト海に面したハンコ半島の 30 年間の租借と基地の設置、カレリア地峡付近の国境線をフィンランド側に 30ｋｍ後退させる領土割譲などを要求した。この案は受け入れられないとしてフィンランド側はこれを拒否した為両国間の交渉は決裂した。

2.3 開戦と戦況の変遷

1939 年 11 月 26 日、ソ連はカレリア地峡付近の国境線で赤軍将兵 13 名が死傷する砲撃事件が発生したと発表し、これをフィンランド軍からの挑発行為だとして非難した。同日にソ芬不可侵条約を破棄、11 月 29 日には国交断絶が発表され、11 月 30 日にソビエト赤軍はフィンランド領内への侵入を始めた。

兵員数で劣勢なフィンランド軍は各戦線を突破され敗走していったが、12 月 4 日から始まった吹雪、フィンランド軍のゲリラ戦術[2]や焦土戦術[3]によってソ連軍の進撃は停滞していった。

猛吹雪の中、フィンランド軍は新しく編制したスキー部隊で車輛が凍って身動きが取れないソ連軍に強襲を仕掛け、各戦線を突破し包囲殲滅を繰り返していった。

同時に政府は北欧各国や英仏をはじめとする連合国に援助を要請していたが、北欧各国は正式な介入は国民が認めず、またドイツはフィンランドに対する連合国の支援もその通過も認めなかった為　フィンランドは孤立していった。

各地で奮戦を見せたものの次々と戦力を投入してくるソ連軍に対し､物資の欠乏や兵士の疲労もありフィンランドは 1940 年 3 月

---

[2] 戦線外において小規模な部隊を運用して、臨機応変に奇襲、待ち伏せ、後方支援の破壊といった、攪乱や攻撃を行う戦法。

[3] 敵軍の追撃を遅れさせるため、占領されるであろう地域のインフラや食料などを破壊、あるいは焼き払うといった戦術。

13 日にモスクワでソ連との講和条約を締結した。

2.4 両軍の損害

両軍の損害は以下の通りである。(所説あり)

	フィンランド	ソ連
戦死者	26662 人	約 12 万人（行方不明者含む)
戦傷者	39886 人	約 26 万人
捕虜	1000 人	約 5600 人
航空機	62 機	約 1000 機以上
戦車	0 輌	約 2300 輌

この損害の統計だけを見ると、とてもソ連の勝利だとは思えないだろうし、また、軍事の面からみればフィンランドの勝利と言っても過言ではないだろう。しかしながら、結果はソ連側の要求にフィンランドが屈するという形で終結した。つまり、戦争は単に軍事力だけでは勝利することができず、重要であるのは国家を総合的に見たときの国力なのである。

2.5 講和とその後

モスクワ講和条約の結果、フィンランドは全国工業生産の約 20%近くを含む、全国土の 10%の領土をソ連に割譲し全人口の 12%近い約 45 万人が難民となった。この結果に国民は、このまま戦い続けていればこれほど領土を奪われなかったのではないかとの思いから政府に非難が相次ぎ、また国民はより一層ソ連への敵対心を抱くようになる。

2.6 冬戦争におけるソ連の苦戦とフィンランドの善戦の要因

冬戦争では、圧倒的な物量を持つソ連は小国であるフィンラン

ドに大きな苦戦を強いられる結果となった。その要因の一つとして、当時のフィンランドの気象条件が挙げられる。

戦争が行われていた 1939 年から 1940 年にかけては、平均気温マイナス 30 度、最低気温マイナス 50 度といった凄まじい寒さだった。ソ連側は開戦前には小国であるフィンランドとの戦闘を楽観視しており、1 ヵ月程度の食糧弾薬しか用意していなかった。また、前述した通り早々に戦争が終わると考えていたため冬季戦闘に対する対策も全く行っていなかった。その為、補給を絶たれた末に凍死するソ連兵が続出した。

また二つ目の要因としては、1937 年から 1938 年にかけてソ連で行われた赤軍大粛清の影響が考えられる。この大粛清でソ連軍将校の多くが処刑され、軍の質が非常に低下した。現に冬戦争時には時代遅れとされていた一次大戦のような銃剣突撃を繰り返すなどの事例があったようだ。

3.　継続戦争

3.1 開戦の原因

冬戦争は結果的にはフィンランドの敗北で終結した。そして敗戦国となったフィンランドに対する北欧諸国の対応は冷たいものであり、国家の共産化を防ぐ為に枢軸国であるナチスドイツとの関係を深めざるを得なかった。フィンランドはドイツ軍の国内駐留を認め、また、貿易の上でも物資を頼るなど関係を深めていった。

しかし、このドイツ頼みの外交は、世界からフィンランドが当時「世界のならず者」というレッテルを貼られていた枢軸国の一員であると見做される原因となった。

1941 年 6 月 22 日、ドイツはソ連に対して奇襲攻撃を仕掛け、独ソ戦（ソ連側の呼称は大祖国戦争）が開始される。開戦当初、フィンランドは中立を表明したが、ソ連はフィンランド領内に空

爆を行った為、同年 6 月 26 日にソ連に宣戦布告した。フィンランドはドイツとは同盟関係ではないことを強調したが連合国はこれを認めずにイギリスは宣戦布告、アメリカは国交断絶を発表した。

3.2 開戦直後の快進撃からドイツ軍によるモスクワ攻略の失敗

開戦後、フィンランド軍と国内に駐留していたドイツ軍は共同してソ連軍を攻撃し、8 月の末には冬戦争前の国境に到達。また、10 月 1 日にはペトロザヴォーツクを占領し、ムルマンスク鉄道の寸断に成功するなど僅か 3 ヵ月で初期の戦略目標を達成した。

しかし、例年より早い冬によって発生した泥濘と降雪が進撃を阻み、また、補給線が伸びきってしまった事、そしてソ連側が新型戦車であるT-34 を投入したことなどによってドイツ軍は衝撃力を失った。1943 年 2 月 2 日にはスターリングラードにおいて包囲下にいたドイツ軍が降伏し、枢軸国の劣勢は決定的となった。

3.3 単独講和への道

ドイツ軍のスターリングラードでの敗北の報を受け、フィンランド政府は戦争からの早期離脱の手段を模索し始めた。当時のフィンランド大統領リスト・リュティはドイツに対し分離講和を申し立てたが、猛反発を受け生活必要物資の輸入を停止されるなどの事態に陥った。その後フィンランドは、ドイツ側に戦争を継続する旨を伝え、ようやく物資の輸入を再開された。

1944 年 1 月にソ連軍がレニングラードの包囲を破ると、翌月にフィンランドはソ連に対し講和を持ちかけた。しかし、ソ連側の要求は過酷なものであり、その中にはフィンランド領内に駐留しているドイツ軍をフィンランド単独で駆逐することなどが含まれていた。この条件を受諾すれば、フィンランドより先に連合国と講和し、枢軸国から離脱したハンガリー、イタリアなどはドイツ軍に再占領されていたため、その二の舞となる恐れがあった。こ

のような要求を受け入れることはできないため、フィンランドは戦争を継続した。

1944年6月9日に連合軍のノルマンディー上陸作戦に呼応してソ連軍の再攻勢が開始される。ソ連軍は冬戦争時とは比べ物にならないほど戦争慣れしており僅か半月でフィンランド第二の都市ヴィボルグが陥落した。フィンランドはドイツに援助を求め、大統領であるリスト・リュティはドイツと共に最後まで戦うと宣言を行うことでようやく援軍とドイツ製の兵器の援助が進められた。

これらの援助によってフィンランドはソ連軍の攻勢を退けることに成功したが、戦線を押し返すことは不可能であり、このままずるずると戦争が長引けば敗北することは必至であった。また、ソ連側としては、大した資源も工業力もあるわけではないフィンランド領を占領することよりも、戦後の発言権を増やす為に東欧諸国を制圧することに意味を見出しており、フィンランド方面に兵力を張り付けることの無意味さを感じており、実際に兵力の抽出を行っており、ソ連側も再攻勢をかけることなく戦線は膠着した。この膠着時にフィンランドは再びソ連と講和交渉を開始し、また、ソ連側も応じる構えを見せた。

リュティ大統領が行った「ドイツと共に断固最期まで交戦する」という宣言のために、リュティ政権下ではソ連との講和に臨むことができなかった。だが、この宣言はすべてリュティが個人名義で行っていた宣言であった。このため、講和に先立ってリュティは大統領を辞し、軍の最高司令長官であったマンネルヘイム将軍に大統領の座を譲り渡し、フィンランドは政権交代が行われ親独政権ではなくなったことを強調した。親独的であったのは前大統領のリュティだけであるとして、講和交渉を行った。

ソ連が講和交渉の中で提示した条件には2月の講和条件と同じくドイツ軍との決別、フィンランド領内からのドイツ軍の排除が盛り込まれていた。しかし、交渉によってそれを行うための若干

の猶予が認められたため、フィンランドはその条件で講和を受け入れた。フィンランドとソ連の間で休戦協定(モスクワ休戦協定)が調印されたのは 1944 年 9 月 19 日であった。

継続戦争においてフィンランドは冬戦争以上の大きな犠牲を払ったが、圧倒的戦力差を誇っていたソ連軍は、フィンランド軍の奮戦によりフィンランドの 3 倍近い損害を受けた。

4.　戦後

ソ連は莫大な損害を受けつつもポルッカラ以外の戦前要求していた領土は獲得し、目的と公言していたレニングラード周辺の安泰を確保した。さらに隣国フィンランドを敵対国から従属国に変えることで、領土的・外交的勝利は一応の成功を収めた。

しかし、フィンランドでは東欧のようになることなく、独立国としてソ連の支援下で戦うという覚書を提出し、さらにパーシキヴィ路線(当時の大統領であったユホ・クスティ・パーシキヴィからとったもの)と呼ばれるソ連への友好的外交を行った。その点から、「非共産国でありながらソ連に宥和的姿勢を示す」ことは「フィンランド化」と言われて正式な国際政治学用語となるに至った。

5.　総括

冬戦争、継続戦争を通してフィンランドは多大な犠牲を払いながらも独立を維持した。それは、国民も一丸となって侵略者であるソ連と立ち向かうことができたからだろう。つまりフィンランドの国民にとって、独立というものは血を流してでも守るべきものだと考えたからではないだろうか。

他民族の統治を受けていた民族にとって独立は悲願である。だがそれを実際に続けることは非常に難しい。そのために戦った民族ならば数多く存在しているが、成功し建国を成し遂げた例は非常に少ないことからもそれは明らかである。

日本が主権を失ったのは敗戦後の約6年間だけであったためイメージしづらいかもしれないが、これを機会に、これまで当たり前のように受け取っていただろう日本民族の国家が存在していることについて一度考え直してみてもよいのではないだろうか。

参考文献

齋木伸生『フィンランド軍入門 極北の戦場を制した叙述詩の勇者たち』(イカロス出版、2007)

齋木伸生『冬戦争(Historia Talvisota)』(イカロス出版、2014)

梅木弘『雪中の奇跡』(大日本絵画、1989)

梅本弘『流血の夏』(大日本絵画、1999)

児島襄『第二次世界大戦 ヒトラーの戦い』第3巻、(文藝春秋社、1992)

児島襄『第二次世界大戦 ヒトラーの戦い』第4巻、(文藝春秋社、1992)

児島襄『第二次世界大戦 ヒトラーの戦い』第10巻、(文藝春秋社会、1993)

ヴェルナー・マーザー『独ソ開戦 盟約から破約へ』守屋純訳(学習研究社、2000)

ルドルフ・シュトレビンガー『赤軍大粛清 20世紀最大の謀略』守屋純訳(学研、2001)